



Title	J.K.イングラムと歴史学派運動
Author(s)	佐々木, 憲介
Citation	経済學研究, 51(3), 105-125
Issue Date	2001-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/32238
Type	bulletin (article)
File Information	51(3)_P105-125.pdf



[Instructions for use](#)

J.K. イングラムと歴史学派運動

佐々木 憲 介

はじめに

ジョン・ケルズ・イングラム (John Kells Ingram, 1823-1907) は、トーマス・エドワード・クリフ・レズリー (Thomas Edward Cliffe Leslie, 1827-1882) と並んで、イギリス歴史学派の初期の展開を担った人物である。ともにアイルランド出身のイングラムとレズリーは、1870年代に、それまで支配的であった古典派経済学に対する激しい方法論的批判を開始し、その後のイギリス歴史学派運動の先導者となった。経済学における理論派と歴史派との論争といえば、オーストリア学派の創始者 C.メンガーとドイツ歴史学派の総帥 G.シュモラーとの間に起こった「方法論争 (Methodenstreit)」が有名であるが、実は類似の性格をもった論争が、攻守所を変えて、イギリスでも行われていたのである。イギリスにおける方法論争は、1870年代に入っただけでなく、アダム・スミスの『諸国民の富』の方法は演繹法なのか帰納法なのか、という解釈問題のかたちをとってくすぶり始めた。このような解釈問題は、レズリーの1870年および1875年の論文で取り上げられ、さらに、1876年にポリティカル・エコノミー・クラブが主催した『諸国民の富』出版100年記念の討論会においても争点となった¹⁾。しかし、このようにくすぶっていた方法論争が本格化するに至ったのは、レズリーが1876年に発表し

た論文「経済学の哲学的方法について」と、イングラムが1878年にイギリス科学振興協会 F 部門 (経済学・統計学部門) で行った会長講演「経済学の現状と展望」とが、イギリスの経済学界に大きな衝撃を与えたためであった。これらはいずれも、スミス解釈というかたちを借りることなく、古典派経済学の方法を正面から攻撃し、それに対して歴史的方法を対置するものであった。両者の批判は、理論的方法を支持する論者からの反批判を呼び起こすことになり、ここにイギリスにおける方法論争が本格化することになった²⁾。イギリスにおける方法論争は、ドイツ語圏の論争とは逆に、歴史派が理論派を批判するというかたちで始まったのである。

ここで取り上げるイングラムは、イギリスにおける方法論争の重要な一翼を担った人物であった。彼は、ダブリン大学トリニティ・カレッジで弁論術・英文学・ギリシア語の教授を努めた人物で (Black 1987)、シェークスピアに関する著作や、ギリシア語・ラテン語の語源学に関する著作などを残していることから分かるように、狭い意味での経済学者ではなかった。しかし、経済学関係の学会にも早くから関わりをもち、1878年当時は、アイルランド統計・社会研究協会の会長であるとともに、イギリス科学振興協会 F 部門の会長でもあった。そして、この1878年の講演によって、「イングラム博士は世界の経済学者の注目を集めるに至った」

1) レズリーについては、佐々木 (2000) を参照されたい。『諸国民の富』出版100年記念の討論会については、ポリティカル・エコノミー・クラブの報告集 (Political Economy Club 1876) を参照されたい。

2) イングラムやレズリーに対して反撃を開始したのは、まずロウ (Lowe 1878) やシジウィック (Sidgwick 1879) であった。

(Ely 1915, vii, 2頁) ののである。さらに、彼は1885年に、『大英百科辞典 (*Encyclopaedia Britannica*)』第9版に経済学史に関する論文を発表し、これが改訂増補されて、1888年に独立の著書として出版された³⁾。それが、『経済学史 (*History of Political Economy*)』であるが、この著作は非常な成功を収め、しばらくの間イギリスで出版された唯一の経済学史概論として、多くの読者を獲得した。その後、1915年に、イリー (Richard T. Ely) が序文を付し、スコット (William A. Scott) が第7章を増補したものが出版され、これが決定版として今日も用いられている。各国語にも翻訳され、ドイツ語、フランス語、ポーランド語、ロシア語、スウェーデン語、チェコ語、セルビア語、オランダ語の訳書が出版された (Koot 1987, pp. 53-59, 225-226)。日本語訳も行われ、1896年には、阿部虎之助訳『哲理経済学史』(経済雑誌社) が刊行された。1925年には増補版の翻訳として、米山勝美訳『経済学史』(早稲田大学出版部) が刊行されている。クートによれば、「歴史派経済学者としてのイングラムの名声は、その『経済学史』の好評に基づくものであった」(Koot 1987, p. 59)。また、イングラムの経済史・社会史研究の代表作である『奴隷及び農奴史』(*A History of Slavery and Serfdom*, 1895) も、『大英百科辞典』第9版の論文を改訂増補したものであった。

では、このようにして名声を確立したイングラムは、歴史学派の運動のなかで、どのような役割を果たし、どのような功績を残したのであろうか。イングラム自身が明言し、彼に言及するすべての研究者が同意するのは、彼がオーギュスト・コントの観点から古典派経済学を批判し歴史学派の運動を解釈した、ということである。この点は、イングラムの独自性を示すものであ

り、他の多くの歴史学派の経済学者とは異なる点であった。また、シュンペーターは、イングラムが公衆の心を捉えたのは、高邁な情趣と道徳的気品、経済学を他の社会諸科学の研究から孤立化させることに対する抗議、コント主義的な進化と歴史的相対性の強調、帰納と演繹との対比によってであったとする。しかし、なんらかの経済学的研究をしたということはできず、イングラムが新経済学 (New Economics) についてべらべらとしゃべることが可能であったのは、彼が専門技術的な経済学を適切に把握していなかったからだと述べている (Schumpeter 1954, p. 823)。クートは、徹底性・独創性という点でイングラムはレズリーに劣っていたとし、イングラムの主要な功績は、演繹の経済学に対する歴史学派的な批判を広く普及させた点にあったとする (Koot 1987, p. 53)。たしかに、古典派経済学に対するイングラムの理解は不十分であったし、新しい経済学の建設者にもなりえなかった。その意味では、イングラムをコント的な見地からの歴史学派の普及者とすることに間違いはない。しかし、われわれの観点からすれば、イングラムの主要な功績は、なによりもまず歴史学派の運動を経済学史のなかに位置づけようとした点にある、ということができる。彼は、進行中の運動の渦中にいながら、その運動の歴史的意義を明らかにしようとした。つまり、方法的には、もともと統一されていた社会諸科学の研究から、経済学がいったん部分学として分化し、それが再び統合されるべき時期にきていること、また実践的にも、政治的束縛から産業活動を解放した経済的自由主義が、自由な活動ゆえの弊害を生み出し、それを解決するための社会改良が必要な時期にきていること、これらの事情を背景として歴史学派が成長してきたというのである。イングラムは、学説の相対性という観点を歴史学派運動にも適用し、この運動が登場するに至った知的・社会的文脈を、自ら解明しようとしたのである。

3) イングラムの1885年論文に対して、シジウィックは同年のF部門会長講演でこれを批判した (Sidgwick 1885)。

1. 歴史学派の興隆

(1) 歴史学派の起源

イングラムは、歴史学派の運動を、ヨーロッパとアメリカとにまたがる国際的な広がりをもった運動として認識した。すなわち、歴史学派が最も大きな勢力を獲得したのはドイツにおいてであるが、イギリス、イタリア、ベルギー、アメリカなどでも歴史学派が興隆しており、その結果これらの国々では、旧学派 (the old school) と新学派 (the new school) とが競合し、経済学界に二元主義が現れるに至ったというのである。ここでいわれている旧学派とは、古典派経済学のことであり、イングラムはこれを正統派経済学 (the orthodox economics) とも呼んでいる。新学派とは、いうまでもなく歴史学派を意味している (Ingram 1915, pp. 207-210, 訳 306-311 頁)。イングラムによれば、ドイツ歴史学派は、ザヴィニーに代表される歴史法学派の考え方を経済の分野に拡張することによって興った。ヴィルヘルム・ロッシャーが経済学における歴史学派の起源であり、その基本原理は、彼の『歴史的方法による国家経済学講義要綱』(1843年) に述べられている。しかし、ロッシャーは歴史的方法を提唱したものの、その後の彼の著作には歴史的方法の影響があまり見られなかったとする。ロッシャーと並んでドイツ歴史学派の創始者となったのは、ブルーノ・ヒルデブラントとカール・クニースであったが、歴史的方法の本質的特徴がより完全な形で開示されたのは、ドイツにおける新世代の手によってであった。そのような新世代とみなされるのは、ルヨ・ブレンターノ、グスタフ・シュモラー、アルベルト・シュフレ、アドルフ・ヴァーグナーなどである。さらに、「ドイツの影響によって他国の見解も変化したが、その影響はおそらくイタリアにおいて最も強く、フランスにおいて最も弱かった」(Ingram 1915, pp. 209-210, 訳 310-311 頁)。イギリスにおいても、これに対応する運動が起こっており、その代表者がクリ

フ・レズリーである。ベルギーでは、エミール・ドゥ・ラヴレーが歴史学派の傾向を代表している。アメリカにおいても、経済学者が新旧2つの学派に分かれるに至っており、新学派の側に貢献した経済学者として、セリグマン、イリー、アダムズ、パッテンなどがいる、というのである。

このように、イングラムは歴史学派の運動を国際的なものとして捉えていたが、その場合の彼の議論の特徴は、歴史学派の考え方の根源について、ドイツ歴史学派の独創性をかなり割り引いて評価するという点にあった。すなわち、歴史学派運動の最大の拠点ドイツであるが、その考え方の根源は、むしろフランスやイギリスにあったというのである。イングラムによれば、ロッシャーなどが歴史法学の方法を経済学に応用して歴史的方法を提唱するようになる前に、オーギュスト・コントやリチャード・ジョーンズが、同様の方法をすでに唱えていた。フランスでは歴史学派の運動は弱かったが、そもそもこの運動の根源はコントにあった、とイングラムは主張する。ドイツ歴史学派がその見地を形成するさいにコントの影響を受けたかどうかという点は、必ずしも明らかではないが、少なくとも、ドイツ歴史学派の論者たちが経済学研究に刻印しようとしてきた傾向は、「コントがこの問題について『実証哲学』のなかで説いていたことと大体一致する、という事実は疑うことのできないものである」(Ingram 1878, p. 47)。例えば、クニースの『歴史的方法の観点からの経済学』(1853年) は、「経済科学への歴史的方法の応用について入念に叙述し弁護したものであり、少なくとも論理的な側面に関しては、新学派の最も体系的で完全な宣言となっている」(Ingram 1915, p. 194, 訳 286 頁)。しかし、歴史的方法に関するクニースの議論は、そのほとんどがコントによって先取りされていた、というのである。

「歴史的方法を特徴づけ擁護したときに、クニースがコントに付け加えたものは何もなかつ

た。彼の著述の第2版は1883年に出版されたが、そのなかで彼は奇妙な告白を行っている。すなわち、彼が1852年に執筆したとき、『実証哲学』全6巻はすでに1830年から1842年にかけて出版されていたのであるが、彼はそれらを全く知らなかったし、さらにおそらくドイツのすべての経済学者がそうだったであろう、というのである。……しかしながら、後にクニースがコントの著作を吟味したとき、彼自身の結論の多くを先取りするもの、あるいは『並行するもの』を発見して驚いた、と語っている。これはもっともなことである。というのは、彼の方法論のなかの本当に価値あるものは、すべてコントのなかに見出されるからであり、しかもより大規模に適用され、哲学の巨匠にふさわしい度量の大きい堂々とした力をもって計画されているからである」(Ingram 1915, pp. 198-199, 訳 292-293 頁)。

では、コントによって提唱されていた方法とは、どのようなものだったのであろうか。それは、既存の経済学に対する批判と総合的な社会学の提案という、2つの側面からなっていた。イングラムによれば、既存の経済学に対するコントの批判は、次のような点に向けられていた。すなわち、「第1に、富の事実に関する研究を他の社会現象に関する研究から孤立化させようと試みること、第2に、経済学者の考え方の多くが形而上学的な性格のもの、あるいはひどく抽象的な性格のものであること、第3に、研究の過程で演繹を不当に重視すること、そして第4に、結論をあまりにも絶対的なものとして考察し表明すること」(Ingram 1878, p. 48)、これらの4点が批判されていた。コントは、経済現象を孤立化させて考察することに反対し、独立した科学としての経済学を認めなかった。これに対して、自らの構想として提案したのが、総合的な社会学であった。「コントの考えによれば、社会学の主要な特徴は次のようなものである。(1)それは本質的に1つの科学であり、そのなかで社会状態のすべての要素の関係と相

互作用とが研究される。(2)それは社会の静態論だけではなく動態論をも含んでいる。(3)かくして、それは絶対的なものを排除し、不変性を想像するのではなく、秩序ある変化という考え方をとる。(4)他の方法を排斥するわけではないが、その主要な方法は歴史的比較である。(5)そこには道徳的観念、社会的義務の思念が浸透しているが、これは自然法からの系論として導かれる個人的権利とは対立するものである。(6)『民衆の大義』を構成する一切の偉大な目的を、精神的に支持すると同時に、実践的にも実現しようとする傾向をもつ。しかし、(7)平和的手段によってこの目的を達成しようとし、革命を進化で置き換える」(Ingram 1915, pp. 91-92, 訳 282 頁)⁴⁾。イングラムは、このようなコントの考え方こそが、歴史学派運動の根底にあるものだと考えていた。

歴史学派の方法を先取りしていたとされるもう一人の人物は、リチャード・ジョーンズであった。イングラムによれば、ジョーンズは、リカードウの体系に対する初期の批判家のなかで、最も体系的かつ徹底的な攻撃を行った経済学者であった。しかし彼は、後続の者たちから正当な扱いを受けなかった。「J.S. ミルは、彼の著作を利用したにもかかわらず、その功績を軽く扱った。ロッシャーでさえ、全く証拠を挙げることなしに、ジョーンズはリカードウを十分に理解していなかったと述べている。他方でロッシャーは、ドイツ歴史学派によって説かれたものの多くがジョーンズの著作のなかに明らかに示されているという事実については、沈黙しているのである」(Ingram 1915, p. 139, 訳 201-202 頁)。ジョーンズは、経済学の研究対象は想像上の世界ではなく現実の世界であり、経済学説は時代や地域によって相対的なものである、というような主張を行っていたが、これらは後に歴史学派の観点として知られるようになるものであった。その意味でジョーンズは、言及されること

4) 引用文中の傍点は原文イタリックを表す。

は少なかつたけれども、実質的に歴史学派の立場を先取りしていたというのである。すなわち、

「ジョーンズは帰納法に従っていた。彼の結論は、当時の事実についての広範な観察に基づいており、また歴史の研究に助けられたものであった。……彼が研究すると明言した世界は、抽象的な『経済人 (economic men)』が住んでいる想像上の世界ではなく、時と場所とが異なるのに応じて、土地の所有と耕作とがさまざまな形態をとり、そして一般に生産と分配の状態がさまざまな形態をとっている、現実の世界であった。文明の進歩の異なった段階にある共同社会には、そのようなさまざまな生活システムがあるということ認識した結果、ジョーンズは、彼が『諸国民の経済学』と呼ぶものを提唱するに至った。これは、地球の片隅に存在する例外的事実を、すなわちごく一部でのみ実現されている事実を、人間社会の不変の定型を表すものとみなし、各共同社会の初期の歴史や特殊な発展が経済現象に及ぼす効果を無視するという習慣に対して、抗議するものであった」(Ingram 1915, pp. 140-141, 訳 203-204 頁)。

このように、イングラムによれば、歴史学派の根源はドイツにではなく、むしろフランスのコントとイギリスのジョーンズとにあった。そして、このような見解はイギリス歴史学派の位置づけと関係していた。すなわち、イギリス歴史学派は、ドイツ歴史学派というよりも、コントとジョーンズとから直接の影響を受けているものとして位置づけられたのである。

(2) イギリスの状況

イギリスにおける歴史学派運動を先導したのは、クリフ・レズリーであった。イングラムによれば、「経済学研究の適切な機関としての歴史的方法の哲学的基礎がイギリスの著者によって初めて体系的に言明されたのは、T.E. クリフ・レズリーの論文においてであった。彼の論文は、1876年にダブリン大学の定期刊行物 *Hermathena* に掲載され、その後1879年に彼

の『道徳政治論集』に収録された。この論文は、経済科学の論理的側面を取り扱った出版物のなかで、ミルの『未決問題』所収の論文以降に現れた最も重要なものである」(Ingram 1915, p. 222, 訳 330 頁)。レズリーの経済学は、ジョーンズのそれに類似するものであった。しかし、ジョーンズが同時代の人々からほとんど無視されたのに対して、レズリーの論文は大きな反響を呼び起こすことになった。イングラムは、このような相違を生み出すことになった事情を2つ指摘している。第1に、ジョーンズの声は、その時代の経済学界にあって、リカードウに向けられた一般の賞賛によって圧倒されたが、レズリーが著述をしたのは、その幻想が破れ、イギリスにおいても演繹的な経済学に対する逆風が吹き始めたときであった。第2に、レズリーは、コントの社会学に接することができたという点で、ジョーンズより有利な立場にあった。すなわち、「ジョーンズがわれわれに残したものの多くは——その大部分は残念ながら断片的なものである——、クリフ・レズリーの後年の労作に類似するものである。しかしながら、レズリーはコントの社会学を知っているという利点を有していた。コントの社会学によって、社会の一般的運動についてのより広範な見地を獲得しただけではなく、方法についての把握もより強固なものになった」(Ingram 1915, pp. 141-142, 訳 206 頁)。たしかに、レズリー自身、自分はコントの追随者ではないと断りながら、総合的な社会学に対しては大きな期待を抱いていた。このようにして、イギリスにおける歴史学派の運動がクリフ・レズリーによって先導されることになった。イギリス歴史学派は、決してドイツ歴史学派の模倣ではなく、「逆にきわめて独創的な性格のものであって、これを代表しているのがクリフ・レズリー氏である」(Ingram 1878, p. 47), というのがイングラムの理解だったのである⁵⁾。

5) マローニも、イギリス歴史学派に対するドイツ歴史

では、イギリスにおいて古典派経済学に対する逆風が吹き始め、レズリーのような議論が受け入れられるようになったのはなぜなのか。イングラムは、その背景の1つとして、ドイツ歴史学派の影響があったことを否定しない。その影響は、海外の経済学に対する島国的無関心が崩壊するきざしをみせているものとして、肯定的に受け取られた。しかし、イギリスで歴史学派運動が興隆したのは、たんに海外から影響を受けたからではなく、その興隆を促す内在的な事情があったからであった。その内在的な事情とは、古典派経済学の方法と政策とに対する疑念が、人々の間でしだいに強くなっていったということであった。すなわち、「イングランドでは、海外の思潮に対する島国的無関心が支配的な学派の著しい特徴となっていて、そのために遅れをとることになったけれども、ドイツの影響は着実に及んでいる。このような影響に加えて、一部は『正統派』の方法が堅実ではないという疑念から、また一部はそれが鼓吹する実践への深い失望と、たんなる自由放任政策の空虚さが見破られたことから、『正統派』の体系に対する一般的な嫌悪が自生的に成長してきた。したがって、いたるところで歴史派経済学者の体系的な考え方と調和する思考様式と研究方針とが姿を現し、支持されるようになってきたのである」(Ingram 1915, pp. 209-210, 訳 310 頁)。つまり、古典派経済学の方法は科学的に正しい方法とはいえないのではないかという疑念、そして自由放任政策は反労働者政策だという嫌悪感、これらの感情がしだいに強くなって、正統派経済学に対する逆風となったのである⁶⁾。

学派の影響は限定的であったと述べている。たしかにイギリスの歴史主義者は、ドイツの歴史主義者の権威に訴えることもあったが、「しかし、ドイツのどの歴史主義者についても、イギリス歴史主義の形成に主要な影響を及ぼしたとすることは困難である」(Maloney 1987)。

6) 古典派経済学者の学説そのものと、それが一般に受容されたときの学説とは、必ずしも同じものではない。この点については、イリーヤクートが次のよう

に述べている。1878年のイギリス科学振興協会F部門における講演の冒頭で、協会の他の部門のメンバーのなかに、F部門の存続について異論が出ていることを紹介し、経済学の科学としての地位が疑われていることを指摘した。この問題に対するイングラムの立場は、そもそも経済的事実は科学的検討には適さないのだという見解と、これまで行われてきた研究の仕方が満足のゆくものではなかったのだという見解とを区別しなければならない、というものだった。イングラムによれば、「科学とは、法則を確定し統合することにはかならない。法則とは、一般的事実についての言明である。特殊な事実を説明するということが、それがより一般的な事実の1つの事例であることを示すことなのである」(Ingram 1878, p. 45)。そのような意味で、経済現象・社会現象を科学的に取り扱うことができるということは、すでにコント、ミル、スペンサーが立証したことであるから、この命題を論証するのに時間を費やす必要はない。また、「社会の科学が存在するとすれば、重要性あるいは威信という点で、これに匹敵しうる分野は他にはない、ということを示すのに言葉を費やすつもりもない」(Ingram 1878, p. 43)。社会学は、人間の福祉全体に最も重大な影響を及ぼすものであり、諸科学の頂点にあってそれらを統括する地位にある。したがって、「人類が行う研究の本来の対象が人間であるのなら、わがF部門を放逐したあとの協会の活動は、主役のいない演劇のようなものになるであろう。

に述べている。1880年代初頭に「敵視されていたのは、リカードウやアダム・スミスのような偉大な師の真の学説というよりも、むしろわれわれが、スミス主義およびリカードウ主義という、優美ではないが便利な用語によって呼ぶことができるものであった、ということは現在では十分に明らかである」(Ely 1915, x, 6頁)。「正統派に対するイングラムの攻撃は、大衆版の古典派経済学に対しては適切であったが、古典派の偉大な理論家たちの著作が有する複雑さを考慮すると、それほど適切とはいえないものであった」(Koot 1987, p. 59)。

道理に合った提案であると思われるのは、社会学全体を包括するように F 部門の分野を拡大すべきだ、ということである」(Ingram 1878, p. 69)。つまり、経済学の科学性に対する疑念は、これまで支配的であった学派が実行してきた方法に向けられるべきであって、社会の経済現象を科学的に取り扱うことそのものに向けられるべきではない。経済学の威信と影響力とが低下したのは、経済学の教師たちが奉じていた誤った方法のせいなのであるから、経済学をコント流の社会学に統合することによって、経済学の科学性に対する疑念を晴らすことができる、というのがイングラムの回答であった。より具体的には、「(1) 社会の経済現象に関する研究は、社会的存在の他の諸側面に関する研究と、体系的に組み合わせられるべきである、(2) 抽象および非現実的な単純化への過度な傾向は、抑制されるべきである、(3) アプリオリな演繹の方法は歴史的方法に代えられるべきである、(4) 経済法則および経済法則に基づく実践的指令は、あまり絶対的ではない形で、考えられ表明されるべきである」(Ingram 1878, pp. 68-69)、というプログラムを実行することであった。

イギリスにおいて、経済学の威信と影響力とを低下させることになったもう 1 つの理由は、労働者階級が経済学に対する不信感を強めていったことであった。イリーによれば、「25年前には経済学は一般に信頼されており、多くの人々にとって、その主要原理に関する限りは、完成に近づきつつあるものと思われていた。しかし 1878 年には、賃金取得階級およびその代弁者たちの見解がこぞって経済学を攻撃するものとなり、一般科学者の団体の疑惑をも招くようになった」(Ely 1915, viii, 3 頁)。イングラムは、労働者階級が経済学に対して不信感を強めていったのは、経済学の実践的含意が労働者階級の要求に反するものと解されたためだった、と述べる。すなわち、「労働者階級が経済学説に対して表明した不信は、全く根拠がないわけではな

い信念に基づくものであった。その信念とは、経済学説は既存の社会秩序をあまりにも絶対的に正当化する傾向があるし、その学習がしばしば推奨される——偽装されてはいるが——真の目的は、よりよい秩序を求める大衆の渴望を抑圧することにある、というものである」(Ingram 1878, p. 46)。経済学者は習慣的に、労働を抽象的な観点から考察し、労働者の個性を無視しているために、勤労者の状態に最も深刻な影響を及ぼす問題のいくつかを、考慮に入れないうまま放置してしまう。労働者は、1 つの動力として、いわば生産用具といってもよいものとしてのみ、考慮される。労働はまた、他の商品と同じように、販売される商品とみなされる。労働が商品と呼ばれるのが正しいとしても、労働は他の商品と違って場所の移動が困難であるし、市場で待機していることがしばしば不可能であるといった特殊性がある。したがって、労働を抽象的な観点から考察するのではなく、現実的な生活実態に即して考察することが必要である。イングラムによれば、「あいまいな一般化のなかに現実を隠してしまわずに事実に着目し続けるだけで、産業生活の本当の状態についての、より真であるとともに、より人道にかなった考え方に、われわれは導かれるであろう」(Ingram 1878, p. 58)。このようにして、歴史学派の特徴の 1 つをなす、改良主義的な志向と具体的な事実調査との結合が現れることになる。

2. 研究上の観点

(1) 社会生活の統一性

すでに述べたように、コントによる経済学批判は、まず第 1 に、「富の事実に関する研究を他の社会現象に関する研究から孤立化させようと試みること」に向けられていた。イングラムもまた、これこそが古典派経済学の最大の問題点であると考えていた。すなわち、「経済学者たちは、自分たちが研究する特殊な現象、つまり社会の経済的現象を、社会の他のすべての側

面から孤立化し、したがって社会の物質的側面を、社会的、道徳的、および政治的側面から孤立化し、後者の諸側面を除外して、前者のみを取り扱う独立した科学を構成しようとしている。人間知識の全体に対する経済学研究の関係という問題は、経済学研究をめぐって提起される諸問題のなかで、まさに最も根本的で重要な問題であり、経済学研究の未来は、他のどの点よりも、まさしくこの点にかかっているのである」(Ingram 1878, p. 48)。ではなぜ、経済的現象を孤立化させてはいけないのか。イングラムはこれについて、富よりも大切なものがあるという感傷的な理由から富の現象を孤立化させることに反対しているわけではないとし、「科学哲学から導かれる考察」(Ingram 1878, p. 49)に基づいて主張しているのであるとする。すなわち、古典派経済学者が経済現象の孤立化を正当化するさいに根拠としたのは、社会現象は力学的アナロジーによって研究することができるという考え方であった。この考え方を最も鮮明に提示した J.S. ミルによれば、社会現象は複数の原因が合成して成立しているから、個々の原因から生ずる個々の結果が分かっているならば、諸原因が同時に作用するときの集合的結果である社会現象は、個々の結果を集計することによって求めることができる。したがって、複雑な社会現象を研究する場合には、まず社会現象の諸側面を分離し、個々の因果関係を解明しておかなければならない。経済現象の孤立化はその一環となるものであり、研究上不可欠な手続きである、というのである。この考え方の根底にあるのは、社会現象は独立の諸要素によって構成されているから、それらを個別的に研究した後で再び組み立てることができる、という社会像である(佐々木 2001, 165-167 頁)。これに対してイングラムが対置したのは、社会現象は生物学的アナロジーによって研究されなければならない、という考え方であった。

「有機的世界の研究は無機的世界の研究を前提とし引き継ぐものであるが、無機的世界の研

究から有機的世界の研究へと進むとき、われわれは生きている全体という新しい観念に出会う。生きている全体は、特殊な働きを担当する限定された諸構造をもっているが、それらすべてが相互に影響しあい、有機体の健康な生活という1つの結果を生み出すように協力しあっている。そこで、明らかにここでは、1つの器官の研究を、他の器官の研究や全体の研究から孤立化させることはできないのである」(Ingram 1878, p. 49)。

「これらの考察は、必要な変更を加えて、社会の研究にも適用することができる。社会の研究は多くの点で生物学に類似している。社会システムと呼ぶことができるものの最も特徴的な事実は、そのさまざまな機能の共感性 (consensus) である。これらの機能を独立したものとして取り扱うならば、われわれは間違いなく理論的・実践的な誤謬に陥ることになる。存在するのは社会学という単一の偉大な科学なのであり、その各章で社会的存在の諸相が研究される。これらの諸相の1つが社会の物質的福祉に関するもの、つまり社会の産業の構成と発展とに関するものである。これらの現象の研究は社会学の1つの章をなすものであるが、その章はつねに他の章と密接な関係を保たなければならないのである」(Ingram 1878, p. 50)。

イングラムによれば、社会的諸機能の共感性ということは、とくに社会状態の変化を問題にする場合に重要なものとなる。生物学のなかに、有機体の構成や活動についての理論だけではなく、それが時間とともに発展することについての理論があるように、社会学のなかにも、社会の構成や活動についての学説だけではなく、未開状態から高度な状態への社会の進化についての学説がある。このような社会学の二重の局面は、コントにしたがって、共存の法則を扱う社会的静態論と、継起の法則を扱う社会的動態論とに区分される。人類の進化の行程において、社会の諸要素が相互に分離したまま成長過程をたどったということはない。例えば、西ヨーロッパ

パの諸国民全体、あるいはその中の一国民の現在の経済的狀態は、非常に多様な諸条件の結果であるが、それらの諸条件の多くは、およそ経済的な性質のものではない。科学的、道徳的、宗教的、政治的な観念と制度とが相まって、経済的狀態が決定されている。さらに、もしそれらの観念と制度とが、過去にそのように作用したのであれば、現在もそのように作用していることになる。したがって、社会狀態の変化を問題にする場合だけではなく、ある時点の社会狀態を考察する場合にも、共存する他の社会的要因を考慮することなしに、社会の産業経済を合理的に考察したり説明したりすることは不可能なのである (Ingram 1878, pp. 50-51)。

このような批判に対しては、すでに J.S. ミルが回答を与えていた。ミルによれば、たしかに社会の一般的状态の変化を問題にするときには、社会的事実を一体のものとして取り扱わなければならないが、特殊な社会学的研究においては、社会の一般的状态を固定した上で、新しい原因を導入した場合にどのような結果が生ずるのか、ということ进行研究することができる。社会的事実の間に共感性があるからといって、社会の一部分に注目する研究が不可能になるわけではない。経済学が対象とする富の現象は、直接にかつ第一に、主として富の欲望によって作用する人間行為に依存しているのであるから、暫定的に他の社会的事実を無視することができるのである。つまりミルは、孤立化の方法が適用できる領域と適用できない領域とを区別することによって、コントの批判を一部認めながら、孤立化の方法を防衛しようとしたのである (佐々木 2001, 101-102 頁)。

イングラムが経済現象の孤立化に反対したもう1つの理由は、実践的な問題解決という観点と関連するものであった。すなわち、経済学者が純粋に経済的なものの領域に閉じこもることは、政策を論じる場合に有害な影響を及ぼす、というのである。

「経済学者たちが、通常自分たちの一面的な

態度を正当化するさいに根拠とするのは、次のものである。彼らが公言するところによれば、各問題についての彼らの取り扱い方は部分的であり不完全であるから、真の解決のためには、関係する他のすべての要素が考慮されなければならない。ケアンズ教授が語るところによれば、経済学は、社会生活あるいは産業生活のすべての特殊な計画や体制について、絶対的に中立的である。彼によれば、経済学は、しっかりした見解を形成するための一定のデータを提供するものであって、どの社会問題についても、われわれの最終判断を決定することはできない、というのである。ところで、このように意図的な無関心主義を採用することは、最も重要なすべての主題について、共同社会の大衆の確信を作り出したり裏付けたりすることができる社会的力として、経済学が完全に無力なものになることに等しいのである」(Ingram 1878, p. 53)。

例えば、貿易政策をめぐる問題を考える場合、純粋に経済的な観点から、自由貿易と保護貿易との優劣を論じるだけでは十分ではない。それぞれの政策がもたらすであろう政治的・社会的帰結をも考慮に入れるのでなければ、実践的な政策論として有効ではない。保護貿易論者の不平はつねに、彼らの敵が保護の非経済的な結果をすべて一貫して無視するというところにあるのだから、自由貿易論者も、保護貿易は経済的損失よりもはるかに有害な社会的および政治的帰結をもたらすということを論証するのだから、説得力をもちえない。「私の信じるところによれば、あれこれの経済学的誤謬に対抗するための最も有効な武器は、物質的利害に基づく論拠ではなく、社会のより高級な目的についての考察、および国民集団の生活理想についての考察から導かれる論拠のなかに、しばしば見出されるであろう」(Ingram 1878, p. 54)⁷⁾。

7) イングラムは一貫して自由貿易を支持しており、歴史学派のなかでただ一人、チェンバレン・キャンペーンにも反対した (Koot 1987, p. 57)。

ここにおいてもまた、経済現象を一般的社会学から切り離して取り扱っても実り多いものにはなりえない、という結論に立ち返ることになるのである。

シーニア、J.S. ミル、ケアンズといった古典派の方法論者が経済現象の孤立化に固執したのは、それによって経済学固有の領域を確保し、経済学の学問としての独立性を保持しようとしたからであった。しかし、イングラムにとっては、そのような方針に基づく研究成果は、それなりの価値をもつものではあるが、彼の時代の要請に応えるものではなかった。すなわち、「経済学においてこれまで支配的であった学派が到達した結論は、無価値なものとして放棄すべきである、と考えているわけではけっしてない。それらの結論は、人間界の事象の重要な点を部分的に解明し、公共的活動における有益な指針を部分的に提供するものであった。社会学者一般、あるいはとくに経済学的研究に従事している社会学者に課せられた任務は、すでに導き出された真理を、より申し分のない学説体系に統合することなのである」(Ingram 1878, p. 69)。イングラムは、古典派経済学の成果をすべて否定するのではなく、それを歴史学派のプログラムのなかに包摂しようとした。しかし、総合的な社会科学の樹立ということは、しばしば提唱されながら、ほとんど実行されることのないプログラムであった。その意味では、イングラムの計画もまた、計画だけに終わったものの1つだったのである。

(2) 学説の相対性

経済学説の相対性の観点、すなわち、何が適切な経済学説なのかということは時代や地域が異なるのに応じて異なるという観点は、歴史学派が大いに強調したものであった。この場合の経済学説とは、経済理論と経済政策との両方を含むものであり、そのいずれについても歴史的相対性を主張するものであった⁸⁾。イングラムによれば、経済学説は時代の影響を免れること

ができない。経済学説の興隆および形成は、対応する時代の実際の状況、必要、および傾向によって大きく制約される。重要な社会的変化が起こるごとに、新しい経済問題が姿を現す。そこで、それぞれの時代に行われている理論が影響力をもつのは、多くの場合、その理論が時代の差し迫った問題に対する解決策を提供するように見える、という事実があるからである。それぞれの思想家は、いかに同時代人に優越し先行しているとしても、やはり時代の子なのであり、彼が生活し活動している環境から切り離すことはできないのである (Ingram 1915, p. 3, 訳 3-4 頁)。イングラムは、経済学説は時代精神の影響を受けるというようにも表現している。すなわち、「経済思想の推移は、社会問題一般について行われている思考様式によって、さらに感情の習慣的な調子によってさえも、つねに強力に影響される。どの時代においても、人間の問題をめぐる知的な表現はすべて類似した性格のものであり、同質の刻印をもっている。それは、われわれが時代精神 (the spirit of the age) について語るときに漠然と表象するものにほかならない」(Ingram 1915, pp. 3-4, 訳 4 頁)⁹⁾。そして、19 世紀末という時代は、なによりもまず歴史的精神 (historical spirit) が普遍的に優越していることによって特徴づけられる。この歴史的精神がすべての思考様式に浸透し、各制度および人間活動の各形態についてだけではなく、すべての知識分野について、われわれはほとんど本能的に、現在の状況を問題

8) イングラムの『奴隷及び農奴史』は、経済制度の相対性という観点を示している。それによれば、古代の奴隷制は社会進歩の必然の段階であったが、近代の奴隷制はそうではなく、文明に逆行するものであるとされている (Ingram 1895, pp. 3-4, 訳 4 頁)。この主張は、そもそもコントのものであった (Comte 1839, pp. 574-575, 訳 325 頁)。

9) 経済学史の論じ方を絶対主義と相対主義とに区別することができるが、その場合には、イングラムの『経済学史』は当然のことながら相対主義に分類される (Blaug 1997, p. 4, 訳 8 頁)。

にするだけではなく、その起源と発展過程をも問題にするようになっていく、というのである (Ingram 1915, pp. 1-2, 訳2頁)。

経済学説の相対性の観点からいうと、「イギリス学派によって宣言された定理のほとんどは、現代のイングランドに近似する社会発展の状態と社会条件の一般的な歴史とを、暗黙のうちに想定している。したがって、この想定が実現されていない場合には、それらの諸定理はしばしば適用できないことが分かる」(Ingram 1878, p. 67)。そのような意味での経済理論の相対化は、すでにジョーンズが試みていたことではあるが、このような歴史的精神が横溢する時代に経済理論の相対化を推し進めたのが、ウォルター・バジヨットであった。バジヨットの『経済学研究』の目的は、「経済学の伝統的な体系——リカードウやJ.S. ミルの体系——は、ある基本的な仮定に依存しているのだから、その仮定は事実において普遍的に真なるものではなく、局限された時間と場所の限界内でのみ実現されるものである、ということを示すことであった」(Ingram 1915, p. 218, 訳323頁)。バジヨットの功績について、イングラムは次のように述べている。

「ミルとケアンズとは、彼らが考える社会は現実の人間ではなく想像上の人間、すなわち、たんに『貨幣を追求する動物』とみなされる『経済人』を取り扱うという意味で、仮説的な社会であるということを示していた。しかし、バジヨットはさらに一歩を進めて、ミルとケアンズとははっきりとは述べなかったが示唆していたこと、すなわち経済人が活動するものと想定される世界は、『非常に局限された特殊な世界』でもあるということを示したのである。バジヨットがわれわれに語るところによれば、この特殊な世界を特徴づけるものは、各種職業の報酬の差異によって決定される、1つの職業から他の職業への資本と労働の迅速な移動ということである。現代のイングランド社会にそのような迅速な移動が実際に存在するのかわ

るかについて、バジヨットはかなり逡巡しているが、総じて実質的に実現されているものとみなしている」(Ingram 1915, pp. 218-219, 訳324-325頁)。

イングラムによれば、バジヨットはリカードウを最後まではなはだしく過大評価していた。しかし彼は、存命中に歴史的方法を知ることとなり、それに共感するに至った。そのため、大部分の正統派経済学者とは違った仕方でも、抽象的方法と歴史的方法とを調停しようと試みた。すなわち、正統派経済学者が、一種の上位者ぶった寛容さをもって、彼らの定理についての有用な例示や例証を与えるものとして歴史的方法を扱っているのに対して、バジヨットは、抽象的方法には現代の先進的な産業生活を留保し、歴史的方法には、過去の人間についての一切の経済的現象と現在の人間についての一切の非経済的現象とを引き渡す。しかし、このようなバジヨットの態度は、イングラムには中途半端なものに思われた。たしかにバジヨットは、抽象的方法のなしうることについての考え方を縮小したけれども、少なくとも現代の産業生活を考察する場合には、経済現象の孤立化を支持していたからである (Ingram 1915, p. 219, 訳325頁)。要するに、イングラムによれば、経済現象を孤立化した抽象的な状況の下で、ある原因が作用するときの結果を演繹的に導くという方法は、経済学のどの領域においてもそれ自身で完結するものではなく、あくまでも補助的なものとみなされるべきだったのである。

経済政策もまた、歴史的に相対的なものとみなされなければならない。ところが、そのような歴史的条件を無視して、経済政策が絶対的なものとして主張されることがある。イングラムによれば、「理論と実践の両面で、原理に関する過度に絶対的な考え方および表明として、これまでに経済学者が提示してきたものなかで最も目立つ例は、自由放任学説のなかに見出される」(Ingram 1878, p. 68)。個人の経済的地位は、それ自身歴史の産物である同時代の法体

系に制約されるのであるが、自由放任学説は、経済的自由を自然権に基づく絶対的なものとして主張した。この学説は、かつてはヨーロッパの産業をいたるところで束縛していた誤った政策と戦うための武器として有益なものであったが、この学説が絶対的なものとして理解され表明されたために、私的利益の無制限な作用から生ずる社会的災厄を防止するために政府が干渉することさえも、阻害される傾向があった。しかし、経験と反省とが、この理論の誇張をしないで克服していった。「共同社会全体が自由放任に耐えられなくなり、有害で厄介なもののみならずようになった。為政者はこれを退け、経済学者も長い間それを神聖な定式として繰り返した後で、ついに自らこれに反対するに至った」(Ingram 1878, p. 68)。すなわち、社会の経済的現象はつねに共通善をもっともよく促進するような仕方です動的に自らを調整する、という意味での自由放任学説は、偽りの詭弁であって、科学的根拠を欠いており、自然や事実に基礎をもつものではない、ということに経済学者も同意するようになったというのである。実践的な面で、19世紀末に自由放任学説に代わって登場してきたのが、社会改良のために国家が積極的な役割を果たすべきである、という考え方であった。

(3) 改良主義

イングラムによれば、社会改良のために国家が経済に干渉するという政策は、ドイツ歴史学派の新世代によって強く支持された。ドイツ歴史学派は、国家の機能について、スミスの学派とは違う考え方をもっていた。スミス学派は一般に、国家の唯一の任務は、共同社会の成員を暴力と詐欺とから保護することにある、という考え方に従っていた。この学説は、自然法および社会契約の学説と調和しており、煩雑な拘束と規制の装置を備えた旧経済体制を破壊するには一時有効であった。しかし、現代の増大する実践的要求に応えることはできなかった。事

実、ヨーロッパ諸政府の拙劣で評判の悪いシステムは廃止されたが、今後は無制限な競争から生ずる害悪が表面に現れ、不可避的に、新たな公共的活動の必要性が示されることになった。ドイツ歴史学派は、国家をたんなる秩序維持のための制度とはみなさず、個人の自発的な努力によっては適切に対処しえないすべての目的を実現するための国民的機関とみなす。社会的目的が国家の活動を通してのみ、あるいは最も有効に達成されるときにはいつでも、その活動は正当化される。国家の干渉が適当なものとなりうる事例は、それら自身の功罪と国民の発達段階とに応じて、個々に決定されなければならない。国家はまた知的および美的文化を促進すべきである。国家は、公衆衛生の設備や、生産および運輸の適正な運行のための規制を強化すべきである。国家は、社会の弱者、とくに女性、子供、老人、および貧困者を、少なくともその扶養者や保護者がいない場合には、保護すべきである。国家は、自分自身の怠惰によるものではない損害に対して労働者を保護し、また労働者階級の個人的および集団的な自助努力を助けるべきである (Ingram 1915, pp. 203-204, 訳 299-300 頁)。イングラムによれば、このような社会政策を重視することもまた、歴史学派運動の特徴をなすものだった。

社会政策は、ドイツだけではなく、イギリスでも要請されていることであった。というのは、イギリスでは自由放任政策がより強力に推進されたため、それにともなう弊害も大きかったからである。イングラムによれば、自由放任学説は正統派経済学の重要なスローガンであった。この学説は、穀物法廃止をめぐる政治闘争の結果、とくにイギリスで受容され支持されるに至った。しかし、自由放任学説はこのところ、それが以前もっていた神聖な令名を失ってしまった。これは、科学思想の結果というよりも、実際的に必要に迫られた結果であった。実際的な必要が、経済学上の見解をしないで修正していったのであり、それは経済学者たちが進んで認める以上

にそうだったのである。経済学はこれまで、あまりにも個人的・主観的であった。しかし、「すべての経済学的研究の根底に、富の目的は社会の維持と発展にあるという観念が存在しなければならない。そして、もしわれわれがこのことを看過するならば、われわれの経済学は社会科学に貢献するよりも、論理の遊戯あるいは市場の手引書になるであろう」(Ingram 1915, p. 295, 訳 443 頁)。為政者がどのような抽象的定式に執着しているとしても、社会的な緊急性は為政者の行動を強要する。そして、政治家は実際に自由放任に背を向けることになったのである。国家は、社会的公平と公共的効用のために個人的利益の作用を統制する上で、優れた効力を発揮した。経済学者の大部分も、この問題については見解を変えた。理論家のなかではハーバート・スペンサーが、政府干渉という「新しい奴隷制」と彼が呼んだものに抗議したが、それはほとんど荒野に叫ぶ声であった。国家の経済的受動性という旧式の頑固な教義を復活させようとする限り、彼の抗議は虚しいであろう。新しい秩序の諸条件は、いまだ十分には理解されておらず、われわれはいま過渡期に位置している。しかし、その方向ははっきりしているというのである (Ingram 1915, pp. 297-299, 訳 446-448 頁)。

では、自由放任主義から改良主義へのこのような移行の歴史的意義はどこにあるのだろうか。「18世紀に横溢した消極運動 (negative movement) が経済的側面においてスローガンとしたのは、封建遺制と政治的束縛からの産業活動の解放ということであった」(Ingram 1915, p. 191, 訳 281 頁)。しかし、この消極運動は、産業活動の規制を取り除くだけでなく、中世に起源をもつ一般的規律、すなわち義務の感情や、それと自然に結びついていた社会全体を考える精神を、ともに弱体化させ、利己主義を助長する傾向があった。「旧体制の基底となっていた一群の所信の解体が、未来の指針を形成するのに適した新しい原理を確立する方向への進歩よ

りも速く進んでしまった。この解体をもたらした批判哲学は、その絶対的自由の公式を繰り返すだけで、再構築には無力であった」(Ingram 1915, p. 191, 訳 281 頁)。自由は、個人にとっても社会にとっても、自らを発展させてゆく本性的な力を引き出し、自発的な努力を促すものとして、必要な条件である。しかし、自由そのものが解決をもたらしたわけではなかった (Ingram 1915, pp. 298-299, 訳 448 頁)。いま現れつつあるものは、新しい総合である。社会のこのような変化には、経済学説の新しい形態が対応しており、そこでは経済学説が一般的社会学に吸収され、道徳学の下位部門になる傾向がある (Ingram 1915, p. 30, 訳 43-44 頁)。つまり、歴史学派の運動は、実践的には、自由を否定して中世に戻ることを目指すのではなく、経済的自由が社会改良に寄与するような総合を目指す、というのである。

3. 経済学の方法

(1) 理論的方法の評価

現在の論争が過去の著作の解釈に投影されるということは、めずらしいことではない。1870年代以降、スミス、リカードウ、マルサスなどの方法をめぐる議論が活発になったのも、そうした例の1つである、この問題についてのイングラムの見解は、次のようなものであった。アダム・スミスは、一般的に帰納を重視しただけではなく、とくに『諸国民の論』第3編において、政治的原因によって惹起された現代ヨーロッパの経済的進歩について、その歴史的研究に従事した。「しかし、歴史的研究は彼の後継者たちによって無視され、マルサスの場合には一部例外もあったが、主としてリカードウの影響によってアプリアの方法が支配的なものとなった」(Ingram 1878, p. 63)。スミスが、「人間の行為とそれらの帰結とを経験的に観察する」のに対して、リカードウは、「ある抽象的な仮定から出発してそれらの論理的帰結を追究する」

(Ingram 1878, p. 63)。スミスは、つねに帰納と演繹とを習慣的に組合わせていたから、反対されることが少なかった。ところが、経済学の方法は、主としてリカードの影響によって邪道に導かれた。この科学は、観察に背いて、幾分性急な一般化から論理の遊戯によって現象の法則を展開しようとする誤った方向に導かれた。正統派のメンバーのものとしてされている主要な悪弊も、すべてリカードの例に励まされたものなのである。すなわち、「その主要な悪弊とは、(1) 彼らの考え方がひどく抽象的な性格のものであるということ、(2) 彼らの研究過程で演繹が不当に優勢であること、そして(3) 彼らの結論が過度に絶対的な仕方と考えられ説かれること、これである」(Ingram 1915, p. 134, 訳193-194頁)。要するに、他の歴史学派の経済学者と同様に、イングラムにとっても不倶戴天の敵はリカードだった。

これに対してイングラムは、とくに結論の検証手続きに注目して、アプリオリの方法の実行上の難点を強調する。その批判は、アプリオリの方法が理想化された状況を想定して推論する方法であることを的確に把握し、その根幹を突くものであった¹⁰⁾。すなわち、アプリオリの方法は、ある前提から出発して結論に到達するのであるが、当初の前提においては単純化のためにさまざまな条件が省略されている。そこで、結論を経験的事実に照らして検証する場合、それらの諸条件を考慮して結論を訂正しなければならないのであるが、この訂正が行われることはほとんどない。「一般的に言って、これらの結論は検証のために経験と直接突き合わせることはできない。というのは、それらはただ仮説的なものだからである。すなわち、結論として与えられるのは、結果として生ずる現象ではなく、一定の性格をもつ傾向だけなのであり、その傾向は結果として生ずる現象の1つの構成部

分なのである」(Ingram 1878, p. 63)。つまり、単純化された前提から導かれた結論は、現象の一部を構成する傾向を表すだけであり、現象の全体と一致するものではない。その意味で、検証は失敗するのが普通のことなのである。そしてこの不一致は、演繹の過程が長くなるほど大きくなる。すなわち、「慎重な思索家は、経済学研究における長い演繹に対して深い不信の念を懐いている。……そして、このような懸念はもっともなことだと思われる。というのは、われわれはここで数学と同じ立場には立っていないからである。数学においては長い演繹もつねに確実である。なぜならば、われわれが各段階ごとに手元にもっているものが、すべて正確に限定された与件であり、次々に用いられる各命題も普遍的に真だからである。しかし、経済学者が主張しようるのは、せいぜい一組の傾向なのであるから、その結論の確実性は、推理の連鎖が長くなるにつれて明らかに急速に減退してゆく。われわれが考察している事例においては、論証の過程で用いられた諸定理が特殊な反作用や制限を受けるかもしれない、という可能性がつねに存在するからである」(Ingram 1878, p. 64)。

ところで、イングラムが著述活動をしていたのは、理論的方法を支持する陣営のなかでも変化が起っていた時期であった。つまり、古典派から新古典派への移行期であった。イングラムもそのような変化に気づいており、イギリスにおいて経済学を刷新する道を先導する主役となった人物として、レズリー、バジョットのほかに、ジェヴォンズを取り上げている(Ingram 1915, p. 217, 訳322頁)。しかし、イングラムの目には、ジェヴォンズの立場は折衷的なものに映った。

「彼は歴史的方法の十分な意味をほとんど理解しておらず、歴史的方法を誤って『理論的』方法と対比し、独自の基礎に基づく一定の抽象的学説を検証し例証することのみ関係するものと想定していたように思われる。したがって、

10) 「アプリオリの方法」の詳細については、佐々木(2001)第5章を参照されたい。

彼は『徹底的な改良と再構築』を支持することを宣言するにもかかわらず、歴史的な手続方式と相並んでアプリオリな手続き方式をも留保しようとした。事実、彼の考えによれば、経済学はいくつかの、おそらく多数の様々な研究部門に分かれており、それらのなかの卓越したものとして、一方に、彼の最良の先行者たち、とくにフランス学派の先行者たちから受け継いだような『理論』があり、他方に、イングランドにおいてジョーンズやロジャーズ等々によって奉じられ、彼の同時代人であるクリフ・レズリーによって一般的原理が宣言されたような『歴史的研究』があるのであった。これは、恒久的な妥当性はないが、移行を容易にするのには役に立つ、折衷的見地の1つである。2つの方法が一時的に共存するのは疑いないところであるが、歴史的方法は必ずその競争相手に取って代わるであろう」(Ingram 1915, pp. 226-227, 訳 336-337頁)。

歴史的方法だけではなく理論的方法をも認める者を「穏健な歴史学派」と呼び、歴史的方法が理論的方法に取って代わるべきことを主張する者を「過激な歴史学派」と呼ぶならば、イングラムはどちらかという過激な歴史学派の方に傾いていた。たしかにイングラムは、理論的方法を認めるような発言をする場合もあったが、それは非常に限定された領域で用いられる補助的な方法としてであり、歴史的方法に並ぶものとしてではなかった。すなわち、「われわれはしばしば、ミルが直接的演繹法と呼ぶものに従って、人間の本性と外的世界の法則とについてわれわれが知っているものから、それらの共同作用によって社会現象がどのようなものになるかを、あらかじめ知ることができる。しかし、いわゆる正統派の経済学者たちはその他の方法を認めないのだが、われわれは実際にはこの道を通ってはるか先まで進むことはできないのであって、この方法は単純な事例でしか利用可能ではないのである」(Ingram 1878, p. 59)。彼の本音は、上記のジェヴォンズに言及した引用文に

示されているように、経済学の主要な方法として、歴史的方法が理論的方法に取って代わるということだった。イングラムがジェヴォンズを評価するのは、理論家としてではなく、自由放任政策を否定し、社会改良を支持した経済学者としてであった。すなわち、ジェヴォンズは、『社会改良の方法』(1883年)に収録された諸著作のなかで、労働者階級の地位の向上のための種々の方策を提案したが、それは経済的な性格のものに限られない諸方策であり、そのなかでも最も重要なものの1つは、工場における既婚女性の労働条件に関わるものであった。「これは、彼が自由放任原理を否定したいくつかの例のなかの1つであり、実際に彼は、『国家と労働』(1882年)のなかで、この原理を明晰かつ最も説得的に反駁したのである」(Ingram 1915, p. 226, 訳 335-336頁)。民衆への高貴な共感によって鼓吹された鋭敏で活力ある思想家として、ジェヴォンズの名声は十分に確立されている。彼の名前は、新理論の構築と関連してではなく、実際問題の取り扱い、新鮮で活気に満ちた表現、そして経済学の方法を刷新しようとする精力的な傾向と関連して、後世に残るであろう(Ingram 1915, pp. 228-229, 訳 339-340頁)、というのがイングラムによるジェヴォンズ評価の核心だったのである。

(2) 歴史的方法

歴史学派の経済学者たちは、自らの方法を歴史的方法と呼んだ。しかし、歴史的方法とは、どのような方法を意味していたのであろうか。この点について、シュンペーターは次のように述べている。

「歴史学派の方法論的信念の基礎的なかつ独自の条項は、科学的経済学の原則が主として——最初の頃には、専ら、というふうと考えられた——歴史的なモノグラフの結論から、またはこれらからの一般化から、成り立つべきであるという点にあった。経済学者という職務の科学的部門に関する限り、彼はまず第1番に歴史的

技法を掌握すべきである。この技法は彼が必要とする科学的技法のすべてであり、これを手段として、局地的かつ一時的な特殊な様式や過程の生き生きとしたあらゆる細目を探究するために、経済史の大洋の中に飛び込み、その風味を味わうことを学ぶべきである。そして社会科学において獲得される一般的な知識の唯一の種類は、その後で、この種の研究から徐々に成長してくるであろう。——こういうのが経済学における歴史的方法 (Historical Method) として知られるようになったものの最初の中軸であった」(Schumpeter 1954, pp. 807-808)。

つまり、具体的な事実の細目を調査し、そのなかから一般的知識を獲得すること、これが歴史的方法の中軸だというのである。では、事実の調査から導かれる一般的知識とは、どのようなものであるのか。これについて、われわれは2種類の一般的知識を区別しなければならない。第1は、小規模な出来事に関する経験的法則である。例えば、収入の少ない家計ほど支出に占める食料費の割合が大きい、という「エンゲル法則」のような経験的法則がその例である。第2は、社会の一般的状態に関係する大規模な経験的法則である。例えば、コントの「三段階的法則」、すなわち人間精神は神学的・形而上学的・実証的段階を経て進化し、それに対応して社会の状態も変化する、という歴史の発展法則などがその例となる。イングラムが社会学の法則という場合に念頭に置いていたのは、なによりもまず第2の意味での歴史法則であった。「社会学の方法は、たんに帰納的であればならないだけでなく、歴史的でもなければならない。そして、後者の名称によってその特徴が最もよく表わされるのである。歴史的方法とは、その研究の素材を人間の歴史の一般的な分野のなかに見出すということの意味するだけではなく、さらに社会系列の諸法則 (the laws of social filiation) を発見するために、継起する社会状態の比較を行うことをも意味するのであり、これは異なった発達段階にある有機体を生物学

的に比較する原理に似た過程なのである」(Ingram 1878, p. 60)。イングラムによれば、1つの歴史的段階と他の段階との継起は、決して恣意的なものではなく、それ自身が法則によって規制されているものであった (Ingram 1915, p. 194, 訳 286 頁)。ところが、歴史学派の経済学者たちがすべて、そのような歴史法則を認めていたわけではないのである。

「ドイツ歴史学派のメンバーのなかには、経済科学の相対性を主張しようと切望するあまり、経済法則を全く否定するという誤りに陥った者もいる。……これらの法則は、普遍的なものであり、経済発展の抽象的理論の構築を可能にするものである。ところが、ドイツ歴史学派の一部には、そのような理論をさまざまな国民経済のたんなる記述で置き換える傾向があるとともに、すでに指摘したように、特定の領域的あるいは民族的状态の影響を早まって導入してしまう。この影響というものは、共通の人間の進化の研究から導かれる第一義的な一般法則を、後で具体的な事例に当てはめて修正するときの基礎として、留保しておかなければならないのであるが、彼らはそうはしないのである」(Ingram 1915, p. 200, 訳 294-295 頁)。

例えば、クニースは、学説上の絶対主義の2形態、すなわち世界主義 (cosmopolitanism) と永久主義 (perpetualism) とを、精密に対等な資格のものとなししているように思われる。言い換えると、地方的事情と国民性との相違を見落とす誤りは、歴史的発展段階における差異を無視する誤りと全く同じくらい深刻なものである、と考えている。しかし、この考えは正しくない、とイングラムは批判する。イングラムによれば、歴史の発展法則は普遍的なものであり、まず最初にこれを探究しなければならない。各国ごとの相違は、その後で具体的な事例に適用するときに考慮すればよいものなのである (Ingram 1915, p. 199, 訳 293 頁)。この観点から、『英国産業革命史』の著者アーノルド・トインビーは、普遍的に適用できる歴史法則を認

めていた人物として評価される。「彼は、これまで歴史的方法を推賞してきた論者と比べても、そのなかの多くの者以上にこの方法の真の性格を理解していた。というのは、歴史的方法とは、特殊な地方的あるいは一時的な事情や経済現象を説明するだけでなく、さまざまな国や時代における社会の発展段階を比較することによって、『普遍的に適用できる法則 (laws of universal application) の発見』をめざすものでもある、ということを知っていたからである」(Ingram 1915, p. 229, 訳 334 頁)。このように、同じく歴史的方法という言葉が使われていても、歴史的事実から導かれる一般的知識の意味が違っている場合があった。歴史学派のなかには、歴史の発展法則を認める者もいれば、それを認めない者もいたのである¹¹⁾。

イングラムの場合、歴史の発展法則は、社会が次々に経過する諸段階を体系的に比較することによって求められるのであるが、この比較法が歴史的方法と呼ばれた。

「社会的共存と運動の法則は、個々の有機体の生における共存と運動の現象と同様に、観察の主題となる。とくに発展の研究においては、生物学者が親しんでいる比較法 (comparative method) を修正したものが、適切な研究方法

になるであろう。社会の各段階についての継起の法則を発見し、それらの諸特徴の派生関係を決定するためには、社会が次々に経過する段階を体系的に比較しなければならないであろう」(Ingram 1915, p. 193, 訳 283-284 頁)。

「社会科学の根底に生物学の諸原理が存在するのは疑いないところであるが、社会科学はそれ自身に特有の研究分野と研究方法とをもって、またつねにもたなければならない。その研究分野とは、現代の事実をも含む広義の歴史であり、すでに述べたようにその主要な方法とは、唯一のものではないけれども、『歴史的方法』と呼ぶのが最も便宜であるような社会学的比較 (sociological comparison) の過程なのである」(Ingram 1915, p. 193, 訳 284-285 頁)。

このような比較法が必要になるのは、アプリアの方法によっては社会の歴史的發展を研究することができないからである。社会現象は、一般にあまりにも複雑であり、あまりにも多種多様な条件に依存しているため、人間本性と外的世界の諸法則との共同作用によって社会現象がどのようなものになるかを、演繹的に導くことはできない。実際に、アプリアの方法は、社会の運動における主要な動因であるもの、すなわち人類の先行する世代が後続する世代に対して及ぼす蓄積された影響、あまりにも複雑すぎて演繹的には評価できない影響を、見逃してしまうのである (Ingram 1878, p. 60)。そこで歴史的方法が必要になるのであるが、歴史的方法によれば、まず与えられた事実の観察から帰納的に社会状態の変化に関する経験的法則を導くことになる。しかし、イングラムの歴史的方法においては、経験的法則を求めた後で、それを検証するために、経験的法則を人間本性および外的世界に関する諸法則から演繹的に導出してみせなければならない。すなわち、ここには、帰納によって導かれた結論を演繹によって検証する、という関係がある。「観察から導かれた結論は、少なくとも世界および人間本性の

11) この点は、コントと新歴史学派との関係という観点からいっても興味深いものがある。例えば、ハイエクによれば、「グスタフ・シュモラーは経済学における新歴史学派の創始者であるが、彼はヘーゲルよりもむしろコントの哲学にはっきりと導かれた人物の、たぶん最良の事例であろう」という (Hayek 1952, 訳 339-340 頁)。これに対してシュンペーターは、「シュモラー学派の後期歴史学派にはコント的なものは少しも存在しなかった」と主張する (Schumpeter 1954, p. 418)。なぜならば、シュモラーは、歴史的過程の全体を1つないし2つの要因の作用に還元するような試みからは、はるかに離れた地点にあり、コント流の単一の仮説は、終局的目標としてさえ思い描いてはいなかったからである。「シュモラーにとっては、コントの示唆こそまさに『自然主義的誤謬』の化身にほかならず、コント流の歴史法則はまがいのものだったのである」(Schumpeter 1954, p. 812)。

諸法則についてわれわれが知っているものと矛盾しないことが示される限り、それらの諸法則と関係があるものとみなされる。この方法においては帰納的研究のほうが重要であり、演繹は検証の手段として副次的な地位にあるが、社会学的研究における真に正常な実り多い方法は、まさにこの方法なのである」(Ingram 1878, pp. 59-60)。つまり、イングラムの歴史的方法は、たんなる帰納法ではなく、その一部に演繹の過程を含むものであった。このような方法は、まさにコントが歴史的方法と呼んだものであり、その強い影響を受けて、J.S. ミルが「逆の演繹法あるいは歴史的方法」と名づけて、『論理学体系』第6巻のなかに組み込んだものであった。イングラムによれば、「旧経済学者 (the older economists) の研究において、演繹が過度に幅をきかせていたことは疑いがないところであるが、ア・プリオリな仮定からではなく証明された一般化から出発するのであれば、演繹は正当な過程なのだということを忘れてはならない。経済学の適切な方法は、社会学全体の方法と同様に、帰納というよりも、比較として知られる帰納の特殊な形態、とくに(ミルの用語を用いると)『社会系列 (social series)』』についての比較研究であり、『歴史的』方法と名づけるのが適当なものなのである」(Ingram 1915, pp. 207-208, 訳 306 頁)。したがって、ここでイングラムが「証明された一般化」としているのは、歴史の発展過程についての経験的法則のことであり、「演繹は正当な過程」としているのは、逆の演繹法における演繹のことなのである¹²⁾。

歴史的方法は、実行できる範囲内においてで

はあるが、未来を予見し、未来との関係で政策を採用するときにも、指針として役立つ。この場合、歴史的方法とは、継起する状態を比較して、当該の現象に関係する社会の一般的傾向を指摘するとともに、現存の体制を修正するであろう動因をも指摘するものとみなされる。とはいえ、われわれはその特殊な完成様式や発展の速度を修正することはできるが、その基本的な性質を変更することはできない。現代文明と本質的に相容れない社会的要因を注入しようとする試みは、かりに深刻な攪乱を引き起こさないとしても、少なくともむだな努力に終わるのであろう。したがって、どのような社会的な働きかけの提案も、人間性の自生的な傾向についての分析に基礎を置かなければならないのであって、このことは歴史的方法によってのみ可能なのである (Ingram 1878, p. 61)。例えば、ヘンリー・メインやドゥ・ラヴレーによって明らかにされた、集団的土地所有から個人的土地所有への発展という一般的法則を取り上げてみると、現代に集団的土地所有を復活させようとする企ては、全くの夢想だということが分かる。「社会の初期段階にこのような集団的所有が一般的に見られたということから、それが自然な体制だと主張されることがある。しかし、歴史的方法の示すところによれば、より進歩した段階でそれが消滅するというのも同様に自然なのである」(Ingram 1878, p. 62)。集団的所有は、以前の時代には有益な目的に寄与したが、後の時代には農業技術を固定させ、社会進歩の不可欠な条件である個人的誘因を阻害することによって、進歩を妨げるものとなった。ロシアのミールのような集団的所有は消滅するであろう、そして個人の専有が一般的な規則になるであろう、というのが無難な予測なのである。イングラムの歴史的方法は、歴史の発展法則を解明しようとするものであったから、長期の大規模な予測に向かう傾向があった。このような長期・大規模予測をめぐる問題は、20世紀の社会科学方法論において重大な問題になるのであるが、それ

12) J.S. ミルの「逆の演繹法」とは、まず与えられた事実の観察によって経験的法則を見出し、次にその経験的法則を人間本性の法則から演繹するという手続きを指す。つまり、事実の観察が先で、演繹が後になることから、逆の演繹法と名づけられた。ミルの方法論における「逆の演繹法」の位置については、佐々木 (2001) 第5章を参照されたい。

を論ずることは本稿の範囲を大きく超えてしまうことになる。

おわりに

歴史学派は、しばしば「現実主義的 (realistic)」あるいは「帰納的 (inductive)」な学派と呼ばれることがあったが、イングラムはこのような呼称には反対であった。この点について、彼はレズリーとは違った見解を示していた。イングラムによれば、「現実主義的」という言葉が用いられるのは、正統派経済学の抽象的性格と対照するためであるけれども、正統派経済学の誤謬は抽象を用いることではなく、その乱用にあったのである。すべての科学は抽象を含意し、まさに多様なもののなかに統一性を求める。つまり、社会の法則という一般的なものを求める限り、抽象的であることは避けられないのだから、「現実主義的」という言葉は不適切だというのである。しかし、社会現象についての一般的法則を求めるといっても、歴史学派を「帰納的」と特徴づけることも適切ではない。歴史的方法とは、たんに帰納によって一般的法則を求めるものではなく、社会の発展系列を比較するという特殊な形態の帰納によって、歴史の発展法則を求める方法を意味するのである。その場合、与えられた事実の観察から帰納的に社会状態の変化に関する経験的法則を導き、その後で、この経験的法則を人間本性および外的世界に関する諸法則から演繹するという意味で、歴史的方法には演繹の過程が含まれている。「帰納的」という特徴づけは、経験的法則の検証において演繹が正当な役割を果たしていることを無視してしまうことになる。もし「現実主義的」あるいは「帰納的」という名称がはびこるのを許しておくならば、この学派が非科学的性格のものになる危険性がある。というのは、その名称に誤り導かれて、経済生活の特殊な領域の吟味に没頭し、歴史の一般的法則の探究を忘却してしまうかもしれないからである。した

がって、新しい方向を支持する思想家は、歴史学派 (historical school) という本来の名称を保持するほうが賢明である、というのである (Ingram 1915, pp. 207-208, 訳 305-307 頁)。

このようにイングラムは、歴史の一般的法則の探究を重視した。この点は、コント主義者としてのイングラムの特徴をなすものであった。社会生活の統一性、学説の相対性、改良主義という観点は、他の多くの歴史学派の経済学者と共有するものであったが、歴史の発展法則への志向は、必ずしも歴史学派全体の共有物ではなかった。イングラムの歴史的方法は、この発展法則を解明するためのものであったから、それだけ歴史的方法の理解も独自のものとなった。彼は、国民経済の特殊事情を詳細に調査することよりも、西洋文明全体の進化の系列を重視した。また、経済学の主要な方法として、歴史的方法が理論的方法に取って代わらなければならないとする点で、歴史学派のなかでも過激な考えをもつ人物であった。さらにイングラムは、経済学史に関する該博な知識に基づいて、歴史学派運動の経済学史上の意義を明らかにしようとした。イングラムによれば、経済学が総合的な社会学に統合されるべき時期が来ており、経済的自由主義から改良主義へと経済思想が推移していた。歴史学派運動はそのような知的・社会的文脈を背景として興った運動であるとされたのである。歴史学派運動は国際的な広がりをもった運動であり、その現在の中心地はドイツであるが、ドイツ歴史学派に先立ってコントとジョーンズとが歴史学派の観点を提示していたことが強調された。イングラムの展望によれば、当面は旧学派と新学派とのせめぎあいが続くとはいえ、やがて新学派が旧学派を凌駕するものとされた。しかし、その期待は実現されなかった。イギリス経済学における方法論争は、やがて理論派からの反撃が強くなる局面を迎えるのであるが、その過程を明らかにすることは別稿に譲らなければならない。

《参考文献》

- Bagehot, W. 1895, *Economic Studies*, Clifton: A.M. Kelley, 1973.
- Black, R.D.C. 1987, Ingram, John Kells (1823-1907), in *The New Palgrave A Dictionary of Economics*, London: Macmillan.
- Blaug, M. 1997, *Economic Theory in Retrospect*, 5th ed., Cambridge University Press, 久保芳和・真実一男・杉原四郎・宮崎犀一・関恒義・浅野栄一訳『経済理論の歴史』1-4 (第3版の翻訳), 東洋経済新報社, 1982-86年.
- Comte, A. 1839, *Cours de philosophie positive*, Vol.4: *La partie dogmatique de la philosophie sociale*, Paris: éditions anthropos paris, 1969, 清水幾太郎抄訳「社会静学と社会動学——『実証哲学講義』第4巻より」(中央公論社『世界の名著46: コント, スペンサー』1980年, 所収).
- Ely, R.T. 1915, Introduction, in Ingram 1915.
- Hayek, F.A. 1952, *The Counter Revolution of Science: Studies on the Abuse of Reason*, Indianapolis: Liberty Press, 1979, 佐藤茂行訳『科学による反革命』木鐸社, 1979年.
- Ingram, J.K. 1878, The Present Position and Prospects of Political Economy, in R.L. Smyth ed., *Essays in Economic Method: Selected Papers read to Section F of the British Association for the Advancement of Science, 1860-1913*, London: Gerald Duckworth, 1962.
- Ingram, J.K. 1915, *A History of Political Economy*, Edinburgh: A. & C. Black, new and enlarged edition, 米山勝美訳『経済学史』早稲田大学出版部, 1925年.
- Ingram, J.K. 1895, *A History of Slavery and Serfdom*, London: Adam and C. Black, 青山正治訳『奴隷及農奴史』栗田書店, 1943.
- Jevons, W.S. 1876, The Future of Political Economy, in *Fortnightly Review*, Vol. 20ns, rpt in W.S. Jevons, *The Principles of Economics: A Fragment of Treatise on the Industrial Mechanism of Society and Other Papers* (1905), ed. by H Higgs, New York: Augustus M. Kelley, 1965.
- Jevons, W.S. 1882, *The State in Relation to Labour*, London: Macmillan.
- Jevons, W.S. 1883, *Methods of Social Reform*, New York: Augustus M. Kelley, 1965.
- Knies, K. 1883, *Die politischen Oekonomie vom Geschichtlichen Standpunkte*, Leipzig: Hans Buske, 1930.
- Koot, G.M. 1987, *English historical economics, 1870-1926*, Cambridge University Press.
- Leslie, T.E.C. 1870, The Political Economy of Adam Smith, in Leslie 1879.
- Leslie, T.E.C. 1875, The History of German Political Economy, in Leslie 1879.
- Leslie, T.E.C. 1876, On the Philosophical Method of Political Economy, in Leslie 1879.
- Leslie, T.E.C. 1879, *Essays in Political and Moral Philosophy*, Dublin: Hodges, Foster, Figgis.
- Lowe, R. 1878, Recent Attacks on Political Economy, in *Nineteenth Century*, No.4, rpt. in *The Methodology of Economics: Nineteenth-Century British Contribution, Vol.6: Theoretical Economics, 1876-1914*, London: Routledge/Thoemmes Press, 1997.
- Maloney, J. 1987, English historical school, in *The New Palgrave A Dictionary of Economics*, London: Macmillan.
- 馬渡尚憲 1990, 『経済学の方法ロジー: スミスからフリードマンまで』日本評論社.
- Mill, J.S. 1844, On the Definition of Political Economy; and on the Method of Investigation Proper to It (in *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*), in *Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. 4, ed. by J.M. Robson et al., University of Toronto Press, 1967, 末永茂喜訳「経済学の定義について, およびこれに固有なる研究方法について」(同訳『経済学試論集』岩波文庫, 1936年, 所収).
- Mill, J.S. 1872, *A System of Logic: Ratiocinative*

- and Inductive* (8th ed.), in *Collected Works of John Stuart Mill*, Vols. 7-8, ed. by J.M. Robson et al., University of Toronto Press, 1973, 大関将一・小林篤郎訳『論理学体系：論証と帰納』全6冊，春秋社，1949-1959年。
- Political Economy Club* 1876, Revised Report of the Proceedings at the Dinner of 31st May, 1876, Held in Celebration of the Hundredth Year of the Publication of the "Wealth of Nations" (London: Longmans, Green, Reader & Dyer, 1876), Tokyo: Nihon Keizai Hyoron Sya, 1980.
- Roscher, W. 1843, *Grundriss zu Vorlesungen über die Staatswirtschaft nach geschichtlicher Methode*, Göttingen: Druck und Verlag der Dieterichschen Buchhandlung, 山田雄三訳『歴史的方法による国家経済学講義要綱』岩波文庫，1938年。
- 佐々木憲介 2000, 「クリフ・レズリーの歴史的方法」, 北海道大学『経済学研究』第50巻第3号。
- 佐々木憲介 2001, 『経済学方法論の形成——理論と現実との相剋 1776-1875』北海道大学図書刊行会。
- Schumpeter, J.A. 1954, *History of Economic Analysis*, New York: Oxford University Press, 1954, 東畑精一訳『経済分析の歴史』全7冊，岩波書店，1955-62年。
- Scott, W.A. 1915, The Austrian School and Recent Development, in Ingram 1915.
- Sidgwick, H. 1879, Economic Method, in *Fortnightly Review*, Vol. 25ns, rpt. in *The Methodology of Economics: Nineteenth-Century British Contribution, Vol. 6: Theoretical Economics, 1876-1914*, London: Routledge/Thoemmes Press, 1997.
- Sidgwick, H. 1885, *The Scope and Method of Economic Science*, New York: Kraus Reprint, 1968.
- Toynbee, A. 1884, *Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England*, London: Longmans, Green, and Co., New and Cheaper ed., 1908, rpt., 1920, 川喜田孝哉・斉藤泰次郎・杉浦滋・原田檀訳『英国産業革命史』高山書院，1943。